

歴史講座

信長が築城し家康が改修した小牧山城

2015.10.21

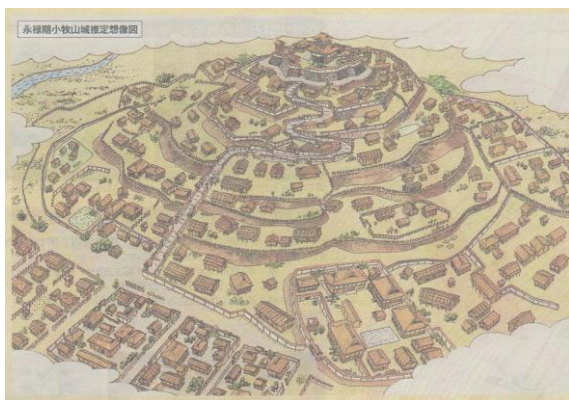
歴史講座の現地探訪として小牧山城を見学した。ふるさとガイドの研修会でも訪れたが、今回は小牧市の小牧山課職員で学芸員の小野さんから、詳しい説明を聞きながら見学することで、とても分かりやすかった。いただいた資料と説明を私なりに整理してみました。

1 近世城郭のルーツと言われる「小牧山城」

尾張平野北東部に立つ小牧山は、標高 85.9m、総面積約 21ha の小山です。四季折々に移る自然の美しさから小牧市のシンボルとして市民に親しまれています。小牧山が「小牧山城」として歴史の表舞台に登場するのは永禄6年(1563)です、織田信長が美濃の斉藤家を攻める拠点として初めて自らの手で築城し、居城としました。4年後の永禄10年(1567)信長は稲葉山城(後の岐阜城)に居城を移し小牧山城は廃城となりました。が、天正12年(1584)「小牧・長久手の合戦」がおきると、徳川家康は小牧山の城跡に大規模な改修を実施して陣城を築き、本陣としました。

江戸時代に入ると、小牧山は家康ゆかりの地として保護されたため、今も多くの堀や土塁の跡が残っています。

2 信長が造ったのは住むお城



推定想像図

永禄3年(1560)桶狭間で今川義元を討った織田信長は、三河の松平元康と同盟を結び、美濃の斉藤を打つべく頂上から美濃方面を一望できる小牧山に城を築き、清州から居城を移しました。しかし、わずか4年で廃城となったことから、美濃攻めの一時的な砦としか考えられていませんでしたが、近年の発掘調査によって小牧山に多数の曲輪や石垣が見つかり、城の様子が明らかになりつつあります。

また、小牧山南部には南北 1.3km、東西 1km にわたる城下町を築いた形跡も見つかっています。

信長時代の小牧山城で特筆すべき点は、山頂付近にある石垣です。「佐久間」の文字の墨書きがある石垣もここから発見されています。山中の大手道や他の曲輪でも石を用いて造られているところが見つかっています。また、東の山麓の帯曲輪地区(現在の史

跡公園)には、堀と土塁で区切られた武家屋敷があったと考えられ、井戸が見つかります。

永禄10年(1567)信長は美濃を攻略し、稲葉山城(後の岐阜城)に居城を移したことから、小牧山城は廃城となり、城下町も一部を残して衰えて行きました。

用語解説

- 土塁(どるい):土を盛り上げて築いた土手・堤
- 堀:敵の侵入を防ぐため、城の周囲に掘られた溝
- 曲輪(くるは):土塁、石垣、堀などで囲まれた平坦な場所
- 虎口(こぐち):城の出入り口

学芸員小野さんの説明

○大手道---小牧山城の正面ルートに当たり、大手口から一直線に伸びています。普通は敵の侵入を防ぐため、ジグザグにしか進めない造りになっています。大手道が天守まで一直線に伸びているお城は、ここと安土桃山城だけで、これが信長の城造りと言えます。 ⇒



○桜の馬場---中腹の曲輪の中では最も大きく、桜が植えられています

○土橋---信長時代に、堀の一部を意図的に掘り残しいつでも取り崩せる細い道を造ったもの。山の中腹にあります。

○曲輪---最大の曲輪は信長の屋敷跡だったと考えられています。



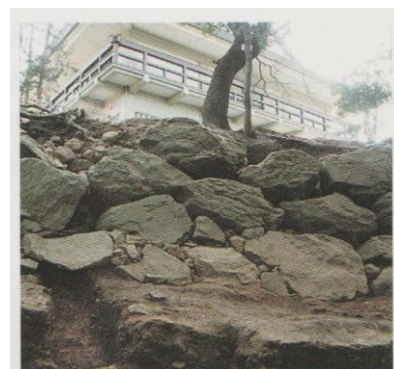
○虎口---家康の改修により5か所築かれたものです。 ⇒

○井戸---信長居城時代の井戸跡を復元しています、中腹にあり山頂を守るように横堀があります。

○土塁と堀---小牧山城外周の土塁と堀は、徳川家康が改修のさいに造りました。

○石垣は石の材質調査の結果、岩崎山の花崗岩が使われていることから、小牧・長久手の戦いでは秀吉方の砦があり、敵陣から運ぶとは考えられないことから、信長が築いたと考えられています。 ⇒

これまでは石垣が二段と思われていたのが、最近更に発見されて三段の石垣が築かれていたことが分かりました。野面積みの石垣は下の方から見上げれば、この三段が一つの石垣に見えるように造られています。このような石垣を使ったお城は信長が最初に造りました。



○城の外周を土塁と堀をめぐらせていますが、土塁は堀を造るため掘り下げた土を盛り上げています。

○野面積みの石垣は表側から見えない裏側に、たくさんの「裏込石」が詰めてあって積み上げた石が安定するようになっています。

○裏込石の流れ込みの中から、墨で「佐久間」と書かれた石が発見されています。



説明してくれた小野さん



石垣の裏に詰められていた裏込石

3 信長の野望と小牧山城

小牧山城で見つかった石垣は、安土桃山城の石垣に先行し、信長がすでに尾張で城郭に石垣を採用するという意図を持って築いていることが分かりました。山頂には建物があったと考えられますが、当時の様子を知ることはできません。これまでは信長が美濃攻めのための簡易な砦と考えられていました。しかし、城の南に城下町が計画的に整備されていたという調査結果と併せて、清州から居城と街を一度に移転させるという、信長の「尾張の国首都移転構想」とも言える、壮大な計画が存在したことがうかがわれるのです。

「城」という字が「土」と「成」でできているように、信長以前のお城は土を掘ったり、盛り上げたりした戦闘・防御のための施設でした。その施設に信長は石垣を採用し(小牧山城)、瓦を葺いた建物(岐阜城)を建て、その集大成として安土桃山城を造り上げたのです。信長は城を単なる戦闘施設から、政治機能を持ち権力・権威の象徴としての建築複合体、つまりモニュメントとしての役割を持たせたのでしょう。お城は「戦う城」から「見せる城」へ劇的に変貌しました。信長が創りだした新しい城の概念は、その後近世城郭に継承され、われわれがイメージするお城へと続くのです。

4 徳川家康が改修した小牧山城

天正10年(1582)、本能寺の変で織田信長が自刃したのち台頭してきたのは、信長の家臣の羽柴秀吉でした。信長の息子の一人である織田信雄は、徳川家康と同盟を結び、秀吉に対抗しました。天正12年(1584)、家康は15,000の兵を引き連れて清

州城へ入り、信雄軍と合流しました。そして、3月犬山城を攻め落とし南下しようとする秀吉の軍勢に対して、家康は小牧山を本陣として秀吉と対峙しました。

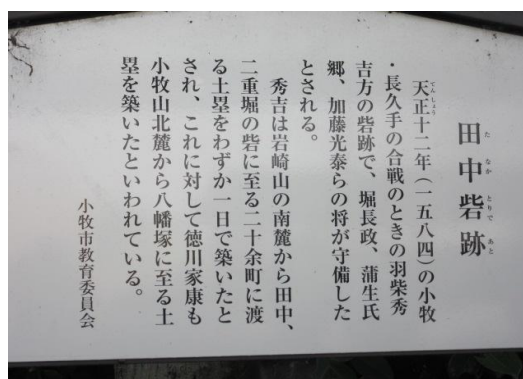
家康は信長が築いた城の跡に改修を加え、陣城としました。主な改修箇所は山の中腹の堀、土塁、虎口の構造、山麓を囲む二重の土塁と堀、5か所の虎口などと考えられています。

小牧・長久手の戦い

小牧山付近では大規模な戦いは行われませんでした。5月のうちに秀吉軍の主力は小牧地区から兵を退き、家康も7月中旬には兵を引きました。11月に秀吉と信雄は和議を結び、信雄の勧めで家康も秀吉と和解しました。そして、合戦の終息に伴い小牧山城は再び廃城となりました。

江戸時代に入ると、小牧山は家康ゆかりの地として、一般の人の入山が禁止されるなど、尾張徳川家の厚い保護を受けてきました。そのため保存状態は良好で、現在でも当時の堀や土塁の跡が多く残されています。

(小牧山に関する年表を次ページに添付しました。このあと近くにある田中砦跡を見学)



参考

小牧山関連年表

時代	できごと
鎌倉・室町時代	小牧山の西中腹から麓にかけて寺院が存在。
戦国時代	永禄6 (1563) 織田信長が小牧山城を築き、清須から居城を移す。 南麓に城下町を整備する。
	永禄10 (1567) 信長、美濃の斎藤龍興を稲葉山城(現在の岐阜城)で下す。 →「岐阜」と改称し、小牧山城から居城を移す。小牧山城は廃城となる。 小牧村庄屋の江崎氏が小牧山守となる。
安土・桃山時代	天正12 (1584) 小牧・長久手の合戦で、徳川家康・織田信雄連合軍が小牧山城跡を改修して陣城を築く。 →秋には和睦して再び廃城となる。
江戸時代	尾張徳川家の所領となり、神君家康公ゆかりの地「御勝利御開運の御陣跡」として、 江崎氏に管理させ、一般の入山を禁止するなど大切に保護するようになる。
	元和9 (1623) 尾張藩の名古屋と中山道を結ぶ上街道の整備に伴い、城下町の名残の町場を現在の小 牧市街地へ移転。 城下町は田畑となる。
明治時代	明治2 (1869) 版籍奉還により、官有地となる。
	明治6 (1873) 県が小牧山を小牧公園として一般に公開する。
	明治21 (1888) 創垂館が建設される。
	明治22 (1889) 尾張徳川家の所有となり、一般の入山が禁止される。
昭和時代	昭和2 (1927) 国の史跡に指定される。
	昭和5 (1930) 尾張徳川家から小牧町へ寄贈される。
	昭和43 (1968) 小牧市歴史館が開館する。
	昭和61 (1986) 初めて発掘調査を実施する。
平成時代	平成16 (2004) 史跡公園を整備する。